

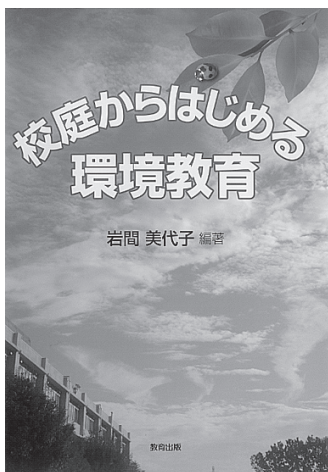
校庭は、子どもたちにとって最も身近な自然環境であるといつてよい。基本的には、大きなフィールドを有し、砂場や鉄棒、トラックなどの運動設備と遊具があり、花壇があつて四季折々の花が咲いている。校庭の周りには、桜などの高木や中低木が植えられ、池や学校菜園などがある学校もある。

環境教育については、エネルギー、リサイクル、温暖化対策など多様な切り口があるが、すべての学校にあり、子どもたちが日々暮らす自然環

## 『校庭からはじめる環境教育』

身近な自然環境を見直す

ESDを  
学ぶための  
オススメ本



境である校庭を利用しない手はないだろう。本書は、そんな校庭の自然から始まる環境教育の手引書である。

岩間美代子 編著

編著者は、まず、校庭をよく観察することから始めることを勧めている。普段見慣れているようでも、改めてよく観察すると、実はよく見えていないことが多く、やり方次第では、多くの新しい発見ができるといふ。

緑や昆虫だけではなく、空や雲や風、光や土や雨や雪、繰り返される季節ごとの様子、これらを感じ取り、子ども

たちに触れさせるようにする。その中から、子どもたちは自然の不思議、自然のつながり、そして、自分も自然の一部であることを実感していくと示唆している。

そして、総合的な学習をはじめ、理科、家庭科、社会など教科との連携で環境教育を推進することの重要性を強調。

具体的には、小学校入学から卒業まで、「校庭の自然観察」「校庭の樹木調査」「土壌動物からの環境調査」「地域の自然観察」から始まり、「できることを考えよう」→「持続する社会作りを地域から」→「学校交流授業」→「自然との共生」→「全校へ発信」まで、20のプログラムを紹介している。

また、自校での環境教育プログラムの作り方をていねいに解説しているほか、授業の展開例も詳しく示している。読み進むうちに、自分の学校の校庭に目をやりたくなることだろう。

教育出版／2100円